

昭和55年2月1日 第3種郵便物認可
平成18年6月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌「沖」第37巻第6号



俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

巢

箱

能村 研三

二人の朴の木

早いもので藤田湘子さんが亡くなって一年が経った。先日、一周忌に合わせて、最後の句集『てんでん』を贈っていた。先師登四郎の『羽化』と同じくらしいの六百余句が小川軽舟さんの手によって選ばれたものだ。

藤田湘子さんは、庵号を「朴下亭」と名乗っていたが、お庭には大きな朴の木があったようで、エッセイを拝見すると、年によつては百もの花を咲かせることが書かれていた。で、よほど大きな朴の木なのだろう。句集『てんでん』の中にも当然、朴の木が詠まれている。

朴の木は風に富むなり夏神楽
朴落葉降らして天は傷もなし

この句集以前にも朴を詠んだ句では、

頭の上に雲ゆく重き朴落葉
朴の花虚子秋櫻子雲に在り

などがある。

先師登四郎にとつても朴はなくてはならない木であった。

母が亡くなった時に詠んだ、
朴散りし後妻が咲く天上華

は余りにも有名になったが、この木は我々が結婚した時、高山の句会から小包で苗木が送られてきたものを

草笛を吹くため曲る廻り道

浮巢見て風を極むる棹さばき

綾瀬吟行・三句

花散つて少し遅れし蔵時計

木の芽張る北に密なる屋敷林

開田院五兵衛の庭の巢箱かな

春昼や稿を書き足す喫茶室

卯の花曇り定年へあと四年

迎へ梅雨水辺の花はなべて白

紙の虫贖作見抜く力あり

菩提寺に尼ある天時梅雨ぐもり

庭に植えたところたちまち成長し、今では二階の屋根を越す高さになっている。しばらくは花がつかない木と諦めて、春先に芽を出してから葉が大きくなるのを楽しんでたが、植えてから十数年したある日、突然花をつける木になった。


登四郎は、この時の状況を次のような句にした。

朴咲けり不壊の宝珠の朴咲けり

上五と下五で二度も「朴咲けり」と詠みながら、中七では「不壊の宝珠」という賞賛のことばで表現していることからこの時の喜びがこの上もないものであったことがわかる。

藤田湘子も朴の木を愛した。十五歳の年の差はあったものの「馬酔木」同門時代から、お互いに主宰誌もち、後進を育成したことなど、登四郎にとつてよきライバルでありよき友達であった。

今頃は天上の朴の木の下で二人で俳句の話でもしているかも知れない。



能村 研三

万 朶

林
翔

波郷回顧

風吹けば万朶に個性さくらばな

遠く遠くマンション灯る夕桜

降りそそぐ落花よ心の髪にさへ

頂上といへども丘よ下萌ゆる

「俳句四季」の五月号は特集「現代俳句の潮流4」として「波郷系俳句の現在と未来」であったが、波郷の写真が三枚載っていて懐かしかった。しかし襤褸のような綿入れを着た写真が一頁大で載っていて驚いたが、よく見ると細字で「昭和25年頃東京療養所にて」とある。それなら粗末な物を着ていても仕方がない。私が清瀬の東京療養所に波郷を見舞ったのは一度だけだが、退院後は砂町の波郷居を屢々訪れている。そして会う度に「林さん、句集を出さなくちゃ駄目だよ。」と言われたものだった。能村登四郎・藤田湘子と共に「馬酔木の三羽鳥」と言われた私だが、私だけが句集を出していなかったのである。

退院後、徐々に健康が回復していった波郷は吟行にも参加するようになったが、
泉への道後れゆく安けさよ

藤にさす陽のいろ藤の色となる

わかばいろまで幾日ぞ木の芽いろ

木の芽張り火宅の人のそそけ髪

窓若葉われに「老ゆな」と言ふごとし

放心か風も無き日の五月鯉

胸中に波郷は若し南風吹く

の名句（昭和27年作）もある。長身

の波郷は、健康な時なら大股にさつさと歩いたろうが、早く泉の水を飲みたいと思いつつも、病後の身をいたわり、同行の人々に後れてゆつくりと歩いていった。その時の心理を「安けさよ」と表現したが、この「安けさ」に複雑な思いが籠められていることは誰にも推察されよう。

波郷が歿したのは昭和44年。会う度に句集出版を促されていた私はあわてて句集の用意を始め、翌45年に第一句集『和紙』を出版、先ず石田家を訪れて、あき手夫人に会い、霊前に句集を供えた。『和紙』は第10回俳人協会賞を受賞した。

林 翔



蒼茫集



一直線 辻直美

新しき樹木のかたち四月来る
あげひばり一直線は無限にて
春ゆふべ水得て固き片栗粉
桜咲くあふるるほどに飯炊いて
春月やもつとも遠きおもて裏
硝子戸に映して春の夜の身丈

つばさ 久染康子

春光へ白布のつばさ句碑開眼
春日燦々さむさ苦手の師の句碑へ
転た寝の覚め際心地蜃気楼
散る前の表面張力さくら山
臺立ちし土筆ぼわんとけむり吐く
ゑぐきもの手皿に受くる春炉端

彼岸風 成宮紀代子

気多卯波切れぎれに見え句碑生るる
松原は等伯ぶりや彼岸風
雁木より一丈の雪ほくほく線
蛇穴を出づまさかあの叔母呆け
芸術は爆発つつじ真つ盛り
デパートの全階母の日の来たり

数秒 上谷昌憲

熱海駅過ぐ数秒の春の海
独活和やさつと夜雨の過ぎけらし
照らされて濠へなだるる夕桜
はくれんのみな夕闇に止まりぬる
飼ひ馴らす携帯電話花見人
よき声の保母めて朝のチューリップ

春のうらら

辻

美奈子

春のうららの水底にある忌日
リラ冷や出生届の薄き紙
残花なほ白湯スープ透くるころ
乳離れの子に乳の匂ふさくら東風
落し角子は母を脱ぎ捨ててゆく
叱りたる日のでふてふの白痛し

杜 椿

淵上千津

師碑詩魂祝ぎ咲く気多の杜椿
姉弟継ぐ句碑のこころ根椿濃し
信夫・登四郎み魂相寄る彼岸潮
仁子・純子いづくや競ふ花筏
遺されし者らの絆花は葉に
何時となき疎遠や桜葉ふれり

相模潮路

遠藤真砂明

白魚船一番網の帆を開く
梅東風の相模潮路まつ平

春濤といふ柔らかき底力
どこからが海かげろふの眩しさに
卒業の一語やすでに翼なす
大泣きの大きな口へ風光る

馬の瞳

大島雄作

立ちて目つむる東京メトロ隴の夜
ハモニカに使はれぬ穴春のくれ
サユリスト貫いて春職を退く
馬の瞳の中に海あり春北風
春の夜のパツクの妻をちらと見し
雨粒を振りほどきをる鯉のぼり

羽昨句碑建立

北川英子

はしなくも句碑建つ朝の初ざくら
開眼経春潮も鳴りひそめをり
句碑の背をぬくめて姉弟彼岸潮
巖門をうららにくぐり夕海光
原発二基聳ゆる間近さくら貝
砂畑折口文字盛をのどかに巡り父子の墓所

潮鳴集

一 声 掛井 広通

うすらひは水脱ぐ遊びかと思ふ
生まれては光りてゐたり春の水
一声の山彦となる厩出し
穴を出し蟻よこつちを振り向けよ
人の死を見にゆく支度かぎろへり

母の手 今瀬 一博

黄沙来る一千キロも誤差のうち
卒業写真みな真ん中へ首傾げ
嬰の手をつつむ母の手花辛夷
花辛夷白の極みに崩れけり
フアスナーが布噛んでゐる目借時

保護色 坂 ようこ

春昼の保護色のごと母のをり
ゆるぎなき真夜の富士あり種下ろす
雪しろや村の民話をきく集ひ
脇役に脇役の賞下萌ゆる
さくらさくら腹開けてゐる販売機

種 袋 清水 公治

青き踏む兄弟に畦ふたつあり
「入つてます」と種袋鳴りにけり
花の雨をみな優しき眼もつ
うしろより魚屋の声花疲
雪残る山韻を指し風見鶏



沖作品



能村研三選

千葉

篠藤千佳子

ポツプコーン春のかたちの生れ継ぎ
黒板と先生の背あたたかし
シンバルを叩くモンキー春の宵
三月のペダル踏み込む力かな
倒立の春のはじめを支へけり
春風に束ねられたるフラミンゴ
一クラス五十六人蝌蚪生るる
泡ひとつ吐いて業平蜩かな
春嶺をゆり動かして大護摩火
高麗王廟黄沙ふりつむ時ふりつむ
青き踏む足裏よりつきあげるもの
春泥にまみれて牛の力満つ
かげろふや民主的とふ多数決
種時くやあをき筑波に礼をして
能登の春惜しむ鳴き砂踏みもして

埼玉

服部 早苗

千葉

佐々木よし子

東京

菊地 光子

くじ売りの窓の小さし花の冷
春眠の遙かに遠く電子音
糶あとのホースのくねり風光る
三月や指ぬらし見る風の道
初蝶やアンテナシヨップの国訛
風落ちて走り疲れの野火の脚
春眠の渚にかさと蕎麦枕
漱石もすでに古典や田螺鳴く
春筍むくやうすももいろのふし
ふだん着のつき合ひてふはあたたかし
甘蔗はやさわわの丈に島の春
春潮にただよふ琉歌旅愁曳き
石筍の仏相に春したたれり
轟きにいのち噴き上ぐ滝桜
鉄塔の四脚ゆるびぬ飛花落花

茨城

鮎川富美子

千葉

安藤しおん

沖作品 15 句選評

*

能村研三

ポップコーン春のかたちの生れ継ぎ

篠藤千佳子

黄色いとうもろこしの実から、真つ白なポップコーンが生れる仕組みは何とも不思議な光景である。昔アメリカのインディアンたちは、とうもろこしの実の中に悪魔が住んでいて加熱されると怒って爆発するのだと言われていたこともあったそうだが、硬い殻がまるで羽化するように生れ代わって白くはじける姿は子ども心にも楽しい。これを作者は「春のかたち」が生まれ継いでいくのだという大胆かつ楽しい発想へ辿りついたのだ。あの白くてバター匂いの匂いがするポップコーンに特定する季節があるとすれば、それはやはり春であろう。

春風に束ねられたるフラミンゴ

服部 早苗

子どもが小さい時、千葉県勝浦の行川アイランドでフラミンゴのショーを見たことがある。ピンクの羽根に赤くてか細い足をしたフラミンゴたちが音楽に合わせて踊るものだが、踊るといっても、群れが盲く隊列をなして右や左に移動するだけなのだが、遠目で見ているとそれが美しく見える。ちよつとした風が吹いたら、倒れてしまうほどの足だが、群れをなしていると

それが春風によって束ねられているようにも見えた。

かげろうや民主的とふ多数決 佐々木よし子

物事を決めるのに最も民主的な方法として多数決で行われることが多い。政治の世界に留まらず、社会一般の通念ともなっている。しかし多数決の結果が必ずしも真実であるとは限らない。多くの人が正しいと思っていることが本当に正しいのかと言えば、必ずしもそうとは言えない。「数の論理で押し切る」とか「少数意見の尊重」という言葉もよく耳にするが、陽炎がゆらゆら揺れている向こうには多数決が必ずしも真実でないことを滲ませている。

くじ売りの窓の小さし花の冷 菊地 光子

宝くじ売り場の窓を詠んだものだが、この作者は普通人が詠まないもの、読めないものを俳句にしてしまう不思議な力がある人だ。普段からよく宝くじを買っている人でも、あの窓口が小さかったことなど気がつかないかも知れないが、そこに気がつき、それを俳句の素材にしようと思いついたこともすばらしい。花の冷という季語の斡旋も成功した。

春眠の渚にかさと蕎麦枕 鮎川富美子

昔はよく蕎麦枕が使われていた。枕自体が結構重く、枕投げにもよく使われた。蕎麦アレルギーの人は使えないようだが、やはり、今でもさらさら音がする蕎麦枕の音はなつかしい。このさらさら音がするのが、作者には、春の渚で耳にするおたやかな波の音に聞こえた。省略を効かせて簡潔に述べているのがすばらしい。

(以下略)